

〈3〉 ウクライナ軍の反転攻勢から防勢転移、 ロシア軍の攻勢、そしてその後 今、最も輸出規制すべきなのはミサイル製造用の部品だ

軍事情報戦略研究所長（軍事アナリスト） 西村 金一

これまで、ウクライナでの戦争の分析について、CISTEC Journal に、『ロシア軍の兵器の質的問題点を顕在化し、今後の戦闘を見通す』（2022.11）、『侵攻長期化に伴うロシア軍の装備や供給の最新状況と戦い方への影響』（2023.03）、『反転攻勢の局面で、兵器の技術レベルの差が勝敗へどう影響したか』（2023.09）を掲載していただいた。今回は、4度目の記事であり、ウクライナ軍の反転攻勢から、防勢転移、ロシア軍の攻勢そしてその後についてである。さらに、ロシア軍の攻撃能力を減少させるために、米欧日は、何に焦点を当てて行動すべきなのかを次の順序で考察し、提案する。

1. ウクライナ軍反転攻勢後の地上戦の戦い
2. 大損害を受けているロシア軍火砲に代わる空軍の対地攻撃
3. ロシアの無人機攻撃の主体は、ロシア製からイラン製へ
4. ロシア軍の短中距離ミサイル攻撃の概要とウクライナ軍の防空
5. 2022年冬の冷酷で執拗なミサイル飽和攻撃の概要
6. 2023年ロシアの100発を超える飽和攻撃の実態
7. ロシアが保有するミサイルが減少、だが、ウクライナの防空も厳しい
8. 無謀な東部戦線でのロシア軍攻勢と今後の行方
9. 今、最も輸出規制すべき焦点は、ミサイル製造用の部品だ

*本文の図（イメージ）・グラフ・表は全て、筆者の西村金一が、各種情報に基づいて作成したものである。

1. ウクライナ軍とロシア軍の戦闘の概要

ウクライナ軍は、数的に圧倒的に有利であったロシア軍の侵攻を止め、その戦力を減殺し、そして、米欧から供与された戦車や歩兵戦闘車を装備した部隊が整い、2023年の6月から、反転攻勢を実施していた。ザポリージャ州の南部戦線では、10kmほど楔を打ち込むことができたが、ロシア軍の3線にわたる防御を突破することができず、その後、ほぼ停止し、防勢に転移している。計画では、表面土壌が泥濘化する前に、防御ラインを突破し、アゾフ海への進出を、少なくともその地への進出の足掛かりまでは、達成したかったと思われる。現実には、南部戦線の一部で第2防御ラインにたどり着き、突破の穴を開けようとするところまでだった。10月からは、東部戦線や北部戦線では、ロシア軍は兵士の損害を出しても、兵員を増派し、突撃を繰り返している。この戦いは、5か月を過ぎた。

図1 4つの戦線



ウクライナ軍は、現在の接触線である防御線の陣地が侵食されているところもあるが、ロシア軍の猛攻を受け止めている。南部戦線でも、攻勢を止め、防勢に転じた。ヘルソンの西部戦線では、ドニプロ川の東岸にとりついたウクライナ軍が、ロシア軍の執拗な攻撃を受けてはいるが、対岸に橋頭堡を作る足掛かりを確保し続けている。

劣勢だった地上軍を支援するために、ロシア空軍（現在、航空宇宙軍の隷下部隊であり、戦闘機や爆撃機は空軍隷下である）は、戦い方を変えている。侵攻当初では、都市攻撃を主体に行っていたが、2023年の5月から地上部隊の攻撃を支援（対地攻撃支援または近接航空支援という）するようになった。ウクライナ地上軍は、ウクライナの防空網の外からのアウトレンジ攻撃には、ほとんどなすすべがないのである。また、無人機攻撃やミサイル攻撃にも工夫を凝らして、ウクライナの都市や地上部隊を攻撃するようになった。

一方、ウクライナ軍では、米欧から供与されている兵器は、ロシアの兵器よりもはるかに優れている。だが、その供給は、ウクライナと欧州の合意の通りにはっていない。実際に戦っている第1線部隊には、必要な兵器・弾薬の量が十分でなく、不足しており、攻撃を停止、または、部分的に後退せざるを得ない状況になっている。

2. ウクライナ軍反転攻勢後の地上戦の戦い

(1) ウクライナ軍が攻勢から防勢に転じた要因

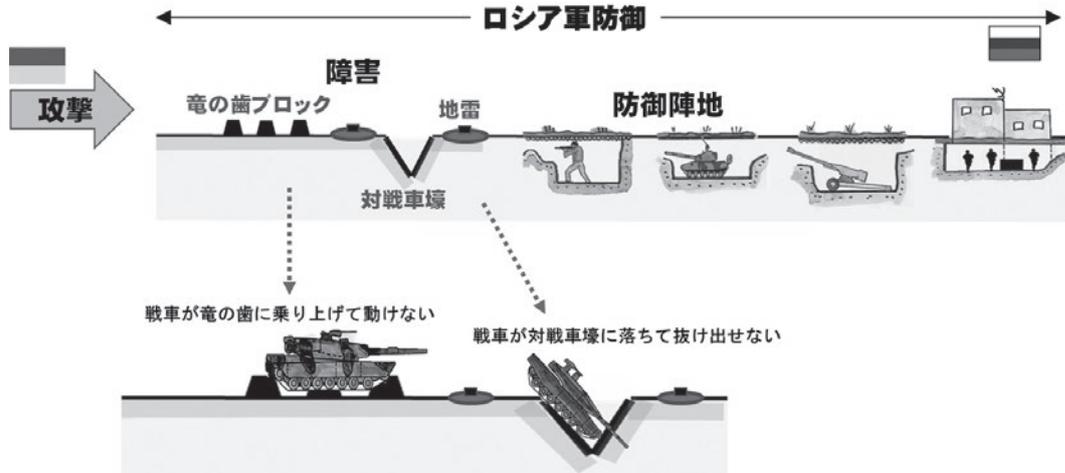
ウクライナ軍の南部戦線での攻勢は、ロシアの防御ラインを突破する途中で、ほぼ止まってしまった。それは、ウクライナ軍総司令部が、「防勢にならざるを得なかった」のか、あるいは、「意図的に一旦、防勢に転じた」のかは、外部から見ると明らかになってはいない。一つの要因で、ウクライナ軍の攻勢が止められたというよりも、下記の要因が複合して、転移、あるいは転移せざるを得なかったと考える。ウクライナ軍が防勢に転じたことは、長期戦を戦うため、また、次の反転攻勢のために、賢明な判断であった。

まず、ウクライナ軍が防勢に転じた要因を考察する。

①ロシア軍の防御ラインに見られる障害処理の困難さ

ロシア軍の防御ラインは、広大なライン全域に、3線に設置されていた。障害だけが設置されているのであれば、その処理は、戦車ドーザーや障害処理爆薬を使えば、多くの損害を出さずに処理できる。だが、その位置に、防御部隊の火力（航空火力・火砲砲弾・対戦車ミサイルなど）が向けられていた。障害処理のために停止し、処理している時に、部隊が攻撃されて、撃破されてしまう。そのため、大変な壁となった。特に航空攻撃の効果は大きかったようだ。

図2 ロシア軍の防御陣地イメージ



②ロシア地上軍大量兵力投入と犠牲を厭わない攻勢

東部や北部の戦線で、ロシア地上軍が、多くの兵力を投入して、攻勢を開始した。プーチン大統領から強い命令を受けて、特別軍事作戦の当初の目標「ドネツク共和国（ドネツク州）とルハンスク共和国（ルハンスク州）の要請に応じて、特別軍事作戦を実施する」を実現することを目指しているようだ。それも、肉弾戦と呼ばれる兵士達の犠牲を厭わない突入が実施されている。

③ロシア軍の組織的な戦闘で高まってきた戦う意識

ハルキウやヘルソンでの戦いでは、ウクライナが攻撃すれば、ロシア軍は、抵抗せずに後退してしまっていた。ところが、現在は、防御陣地も3線に渡って構築し、障害、対戦車火力、火砲火力および航空火力を組織化して戦うようになった。ロシア軍は攻撃されたからといって、直ぐに後退することも少なくなった。侵攻開始から時間の経過とともに、ロシア軍の中に、戦う意志が生まれてきているのも事実のようだ。

④ロシア空軍による地上作戦支援の強化

ロシア空軍は、2023年の5月、都市攻撃から地上軍の支援攻撃（近接航空支援）に作戦を変更した。それは、ウクライナ軍の6月反転攻勢の前からであった。ロシア空軍戦闘機の爆撃は、ウクライナ軍の防空ミサイルの外から実施しているので、その戦闘機を撃墜できない。ウクライナ軍にとっては、ロ

シアの戦闘機になすべがないのだ。その場凌ぎとしてではあるが、パトリオットミサイルを前線近くに配置して、あるいはF-16戦闘機が供与されて、長射程空対空ミサイルで、ロシア軍機を撃墜する方法がある。

⑤ロシアのミサイルによるウクライナ国内の軍事施設等への攻撃

ロシア軍爆撃機から発射される巡航ミサイルや弾道ミサイル、地上発射の弾道ミサイル攻撃によって、都市や軍事施設が攻撃された。多数弾による飽和攻撃によって、ウクライナ軍の防空ミサイルによる撃墜率が低下している。ウクライナ軍の軍事施設も詳細は不明だが、破壊されていると考えてよいだろう。詳細については後述する。

⑥ロシア軍の無人機攻撃の増加

ロシアの無人機は、2023年2月に枯渇してしまうのではないかという英国の予想があった。しかし、ロシアは、その後すぐに、イランの自爆型無人機を導入した。これらの無人機は、都市と地上部隊の攻撃に使用されている。それらは、99%がイラン製であり、無人機攻撃数は、著しく増加している。ウクライナは、この自爆型無人機を撃墜しており、その率は、80%に達している。詳細については後述する。

⑦ウクライナの戦闘能力を低下させている弾薬不足

米欧の弾薬製造量がウクライナの弾薬消費量に追いついていない。ウクライナの報道官の発表では、